集落営農組織の営農開始に向けて

～営農計画の検討と円滑な共同作業のための組織づくり～

１　課題の背景とねらい

八千代市の桑橋、寺台、高本の３地区では、令和２年に基盤整備事業が採択され、これを契機として地域内の主要農家９戸が集まり農事組合法人桑納川（以下（農）桑納川）を設立しました。（農）桑納川では、基盤整備終了後の農地 27.5ha で水稲、ねぎ、なばな、収穫体験用の露地野菜を作付けする予定でおり、組織内に水稲部門、園芸部門、観光農園部門の３部門を設けています。

基盤整備は令和７年に着工予定ですが、工事終了後に各作業を滞りなく進め、経営を軌道にのせるためには、具体化した営農計画を共有し、組合内で役割分担と協力ができる体制を作っておく必要があります。

そこで、農業事務所では本格的な営農開始に向けて、営農計画の具体化と、円滑に共同作業を進めるための体制づくりを支援しました。

２　普及活動の経過・結果

（１）営農計画の検討

営農開始に向け検討が必要な内容を組織のメンバーに提示し、営農部会の開催を提案しました。営農部会では、法人内で話し合いが円滑に進むよう検討事項一覧を作成するとともに、検討事項の解説や補助事業の活用を念頭においた検討スケジュールを説明しました。また、必要になる労力や品目ごとの収支試算、水稲品種の組み合わせによる作付パターンの提示等、検討に必要な情報を提供しました。しかし、メンバー全員での検討は難しく、話し合いは進みませんでした。

そこで、部門長に働きかけて、各部門の営農計画案を作成し、部門ごとに検討を行うことにしました。ねぎでは、令和４年度から試作をしており、栽培記録を元に労働時間と収支の試算を行いました。試算の結果、支出が想定以上に多いことがわかったため、労賃や機械・施設利用料を見直すとともに、部門長を中心に出荷調製作業の省力化やコンテナ出荷の検討、ほ場管理の効率化のための管理機の導入等の案が出され、営農の形が具体的に検討され始めました。

写真１　ねぎの栽培ほ場

（２）観光農園部門における収穫体験の実施

（農）桑納川のメンバーは、野菜の栽培はしたことがあるものの、収穫体験

の実施は経験がありませんでした。収穫体験をするためには、複数品目の収穫時期を揃えたり、集客のための広告、イベントの運営が必要になってきます。このため、まずは小規模で収穫体験を開催することを提案し、令和５年度に落花生とさつまいもで、令和６年度にはえだまめ、じゃがいも、だいこんと品目を増やし、収穫体験を実施しました。

収穫体験の実施に当たっては、１組当たりの区画や料金設定の参考となるよう、県内の体験農園の事例を情報提供しました。また、広報や予約の受付など事前対応も必要であることや駐車場や手洗い用の水の準備、当日の仕事内容と役割分担など、実施に当たっての課題を提起し、検討を促しました。広報、予約受付、集金についてはJA八千代市の協力を得ることになり、集客や運営を円滑に行う体制を整えることができました。

収穫体験では収穫時期を前もって予測し、それに合わせて広報しなければなりません。そのため、栽培管理指導とともに適宜生育状況を確認し、収穫適期の短いえだまめや落花生について、収穫時期の予測を支援しました。落花生については、農林総合研究センターの助言も得て、適期に収穫体験を実施することができました。収穫体験参加者の中にはリピーターもおり、今後の活動に期待が寄せられています。

写真２　さつまいもの収穫体験

（３）水稲の作付け開始

（農）桑納川では、令和７年度から法人として水稲栽培を開始する予定です。法人の機械や施設はこれから整備していくため、栽培開始に当たり必要になる機械の準備について、また作業時期や作業内容、必要な労力を組合内で共有できるよう、水稲部門長と相談しながら必要な機械類や作業計画を一覧化した資料を作成しました。今後、定期的に行われる会議の中で計画を共有し、組合内で役割分担と連携による円滑な営農ができるよう支援していきます。

３　今後の課題

営農計画の検討は始まったばかりです。地域の担い手として営農を継続していくためには、組織づくりはもとより、経営の安定や労力の確保も課題となります。引き続き（農）桑納川のメンバーとともに、検討を重ねていきます。

また、次年度から新たに法人で水稲栽培を開始することから、収量確保に向けた技術支援もしていきます。

４　担当者　八千代グループ　◎鶴岡莉子、小塚玲子

５　協力機関　八千代市、ＪＡ八千代市、農林総合研究センター